目次

私の速記物語 …… 前- 2
以降の速記記録覚書 …… 前- 15
速記符号の見方・書き方 …… 前- 16
線の方向・角度 …… 前- 17
基礎符号 …… 本- 1
２音符号 …… 本- 10
基礎符号の逆流形 …… 本- 23
基礎符号の別形態符号 …… 本- 23
位置利用 …… 本- 25
助詞 …… 本- 31
助動詞 …… 本- 43
重音省略法 …… 本- 66
速記符号での数字 …… 本- 78
外国音時 …… 本- 88
形容詞 …… 本- 88
形容動詞 …… 本- 90
連体詞 …… 本- 92
代名詞 …… 本- 92
接続詞 …… 本- 95
副詞 …… 本- 96
動詞 …… 本-104
寓意省略法 …… 本-111
名詞 …… 本-115
資料 …… 後- 1

私の速記物語

昭和 25 年頃　NHK ラジオ放送　青木一雄先生のトンチ教室があった。なんとかして回答者の答えを部分的にでも記録に残そうと思っていた。

昭和 27 年夏　県立丸子実業高等学校で大きな講演会があり、その時記録を残された先生のことが丸子町中の評判となって、私も、すごい先生がおいでるものだ、と思った。密かに、そういう先生を慕ったものだった。

昭和 27 年秋　私の家の前の竹内貞夫さんという方から「大掃除をしていたらこういうものが出てきたよ、勉強してみなよ。」と、1.5cm 程の一冊の書籍を頂いた。それは、「熊崎式速記術独習書」という書籍だった。

昭和 28 年 4 月　県立丸子実業高等学校入学。その時の担任の今井努先生が、評判の速記をなされた先生だったということがわかった。私の方から、その時の速記についてのことはおたずねすることはしなかった。でも日常の授業の中で、カタカナを略したような字を黒板に書かれていたことがわかった。「こと」は、 ␤ などと書かれていた。

昭和 28 年 6 月頃　国語の担当の金子憲行先生（天台宗寺院の住職でもある）は、「諸君たちの国語能力は低い。この三年間でもっと国語力を上げることだ。みっちりと実力をつけてやるから、しっかり勉強したまえ。」と前置きがあり、「僕が三年前に担任だった生徒に、井出又彦という古町出身の生徒がいた。猛勉強して、あの有名な衆議院速記者養成所に合格した。全国で 20 人という狭い門を突破したんだ。君たちの普通科の先輩なんだ、しっかりやりなさい。」と、1 時間の国語の授業を費やしてお話しされたものだった。どういうものだか、金子先生が黒板に書

かれる白墨の文字が、速記符号ではないかとさえ思われるようになってきた。

昭和28年12月31日　どこかからの風の便りで丸子町内に速記をやっている小日方さんという方がおいでる、ということを耳にした。暮にもかかわらず、その人の家を訪ねた。小日方さんは私が速記に興味を持っていることに関心を示され、「大晦日でもかまいません。速記のお話をしましょう。」と言って下さった。小日方さんという方は、「早稲田式速記学校に学び、今、平凡社にいます。近頃も女性の対談速記をやってきました。」と仰っていた。

昭和29年1月　本屋さんで旺文社の進学雑誌を見た。国会での女性速記者の活躍現場の写真と符号の一部分であった。その中の速記の一部分で、「源氏物語」　、「批准」　の符号は今でもしっかりと覚えている。もちろん、その他にも色々とあったが、今では、全く思い出せない。

昭和29年1月下旬　丸子町の腰越というところに、川上という床屋さんがある。お名前は、川上四郎さんと言った。狭い丸子町にも、速記をされる人が随分おいでるんだなあ、と思った。私は噂を聞くと、すぐに足を運ばずにはいられない。寒い夕方、その川上四郎さんを訪ねた。突然訪れた筈なのに、とても快く歓待して下さった。「確かに若い頃、仮名文字速記をやっていた。長野県と書く場合は、ナ――と片仮名のナを長くするんだよ。長い時間書かされていると疲れてくるんだよ。」などと仰っていた。その頃に書かれた片仮名符号の紙の綴りを少し見せて頂いた。

昭和29年2月16日　この日の午後から思い切って例の熊崎式速記の符号勉強をはじめ出した。片仮名速記符号よりは、易しいと思った。もう少し前から着手すればよかったかなあ、とも思った。この時の初場所、吉葉山潤之助が鏡里喜代治を寄り切りで破り、優勝を決めた。北糖山のシコ名だった新弟子時代からのファ

ンだっただけに、遅い横綱だった。吉葉山の土俵入りは不知火型であった。

昭和 29 年 7 月下旬　信濃毎日新聞の通知を見て、こともあろうにこの暑い日の中、長野市の県立長野工業高校にて奨励試験の乙級に挑戦した。関東甲信地区の範囲の人々が潮のごとく長野工業高校は受験者がごった返していた。私は受験開始前、ぎりぎりに受付をして、会場入りした。教室の中は、熱気が渦巻いていた。席に着くや、すぐに1分間ほどの手ならし（？）朗読が開始された。乙級の速度がどのくらいの速さなのかも知らず、20 秒ぐらいで既に追いつかなくなった。本試験の5分間は、「掻い摘まみ速記」に決めて、書ける部分だけを書いた。30 分過ぎには教室を出てもよいことになっていたが、周囲の人がだんだんに出て行く中を、ひとりキョロキョロばかりもしていられず、速記を勉強している人々の中にいる楽しみを感じて、ゆっくりと教室を出た。午後の信越本線の車中、急にさびしくなってきた。実は私には、大きな夢があったのだった。高校の夏休み明けには、奨励試験の甲級、いや検定試験の三級は取得して、普通科生として、普通科生徒も商業科生徒に負けない面目を発揮し、商業科の生徒から敵を取ってやりたかったのだった。商業科の生徒は、日本商工会議所主催の珠算能力検定試験、あるいは簿記能力検定試験をターゲットとして、毎週日曜日毎に、長野市の県立長野商業高校で受験していた。丸子実業高校生徒も然り。そして、終了するや否や、結果が出て、合否も出て、合格証も出て、すぐ手渡された。そして次の週の月曜日の朝礼には、学校長から再びそれが手渡された。受証者は、前列に横並びとなり、次から次へと順番を待った。だから、この手渡しに時間がかかった。全校生徒の前で発表されて公評されるのだから、こんな名誉なことはない。特に、桜井義敏校長先生は、そのことを商業高校の名誉にかけても毎月曜日朝、完全履行した。特にその頃の丸子実業高校は、学校全体の校風自体が、商業科風土に染められていた。校長先生の御主張されるところは、色々な面で他の科の生徒たちも、商業科生徒を見習い、それぞれの方面で頭角を現しなさい、という教育方針だった。当時の丸子実

業高校には、農業科、商業科、土木科、農業土木科、普通科、家庭科、被服科などがあり、農業科、土木科、農業土木科を除いては、それぞれの科に男女がいた。普通科は、誕生６年目とかで、男女１クラスずつあった。私は、男子普通科生徒として、女子の普通科生徒に先を越されるな、とよく気合を入れられた。さて、そんなわけで日の目を見るのは、いつもいつも商業科の生徒のみに限られ、他の科の生徒は、全校に名前が知れることは全くなかった。だから私は、無理とは思ったのだが、高校卒業までには、「速記」というエキセントリックな学問の名の下、全校生徒の前で私の名前を明かし、「丸子実業に倉嶋あり、倉嶋に速記あり、丸子実業に速記あり」と名声を揚げたかった。もっと切り込んだ言葉で表現するならば、「普通科生徒に速記あり、どうだ商業科生徒諸君、諸君たちにこういう魔法使いのようなことができるかい、私は必ずや商業科の諸君たちの鼻っ柱をへし折ってやりたい、近いうちだ、すぐ間近だぞ。」

昭和 29 年の夏休み明け　私は担任に呼ばれて、学校の売店の隣室の畳の部屋に案内された。「試験の結果はどうだった？」と、いきなりたずねられた。そして、「継続しなければいけないぞ。」と激励して下さった。私も、受験当日のことを詳細に告げた。

昭和 30 年 7 月　長野工業高校に、私は当然のように躍り上がって受験に参加した。奨励試験の乙級であった。海苔で包んだおむすびをひとつ、受験前に食べた。受験者の練習場面を見ていると、小さく細い符号を使用する集団があり、しかも、かなり高速で練習していた。午後に乙級の受験教室に入った。20 人くらいの受験生がいたであろうか。私の記憶するところ、前年夏よりは沢山に書き取れたと思った。

昭和 30 年 9 月　信濃毎日新聞に小さく「衆議院速記者養成所の生徒　秋の修学

旅行で別所の花屋ホテルへ」という記事を見た。その頃、いけしゃあしゃあと「衆養所」宛てに「速記学習で独学で難儀しております。」というようなことを質問形式で手紙を出していた頃ではないかと思われる。関正治先生より、私宛に一枚の手紙が届き、「生徒一行は 10 月下旬、別所温泉に参ります。お答えできることがあれば、その時お話ししましょう。」という有り難いお手紙であった。

昭和 30 年 10 月下旬　午後から雨であった。17 時頃の西丸子線で私は丸子名物を一箱抱いて、大きな夢を描いて雨中を花屋ホテルへと歩を運んだ。雨はだんだんひどくなっていった。到着するや、玄関を少し入った所に何卓かの卓球台があり、ラリーの打ち合いが続いている生徒さんたちの場面を見て、私は早速2階の間に通された。生徒さんたちは夕食を済ませたばかりのリラックスの一場であった。３～４人の中に須田四郎さんという大柄な生徒さんがおられた。関先生にご挨拶と感謝を申し上げた。須田四郎さんら３～４人の生徒さんに現在の私の学習中の符号の全容を見て頂いた。同時に、進め方の状況は如何かを関先生に求めた。結果はきびしいものだった。本当はその通りなのであったが、御教えを懸命に受けた。「この熊崎式は正直言って旧すぎる。一冊を学びきったところで何の効果も得られません。ましてや独習者だ。今からでも遅くない、早稲田式が手頃でしょう、すぐにその通信教育の受講の手続きをとりなさい。ユニークな方式です。残念ながらここで衆議院式は手ほどきできません。」との教えであり、私は雨の別所温泉から西丸子線のチンチン電車のたった１人の乗客となり、小やみもない雨の中を濡れネズミとなり帰宅した。…有り難い教えであった。

～～　さて、確かにその筈、ここまでせっかく覚えてきた基礎符号を
忘れ去ることは苦しい。　～～

昭和 30 年 10 月の別所温泉のことより３～４日後のこと、須田四郎生徒さんより

西来路秀男著の「速記入門ハンドブック」が一冊とあたたかいお言葉のお手紙（関先生、須田四郎さんからの）も添えられていた。速記入門ハンドブックを端から端まで読み終わった。800 符号にものぼる衆議院式の符号と片仮名速記符号、それは実に圧巻であった。愚かな者はどこまで行っても愚かなもの。基礎符号も不整備のままの状態でその 800 符号の大部分というものを従来の所に取り入れてしまうという荒れた作業に入った。

昭和 31 年 3 月 7 日　長野県立丸子実業高等学校卒業。

昭和 31 年 3 月 15 日　上田市馬場町の株式会社秀信社印刷所に入社。尚、この会社には前年の夏休みの頃、アルバイトをさせて頂いた経験から続いたものである。家庭的な会社である。

昭和 31 年 7 月（夏休み中）　私は再び三たび信越本線の人となり、長野市の県立長野工業高校へ。途中、上田駅で林文一さんという人に、いみじくもお会いした。なぜ、その人が速記受験生とわかったかというと、カセットテープレコーダーを肩掛けに動かしておられたこと、そして時に、ひとりごちながら、何か口を動かしながら右指を時に動かしておられたからだ。私の座席の前にはその人だけ。カセットテープを止められたあたりが信越本線の屋代駅あたり。私は、誠に失礼とは思いながらも、問いかけた。「もしかしたら速記の？」ということだけで話は通じた。佐竹式ということと、「本日、一級試験受験で長野市に東京から参りました。」と応答された。駅から会場まで約 20 分間速記の話をした。「帰りもどこかでお目にかかりましょう。」と仰った。乙級受験の教室は2階の教室だったようだった。校舎近で飼育されていた鶉の「コッコッコッコーーー」という声が耳障りだった。前年よりも多量に書けた。終了時、乙級の教室に工業高校近くにお住まいの長野市の文化人、乙部泉三郎先生他数人の関係者が訪れた。そして　　と黒板に書かれ、

左側は清音の「か」、右の小円を付けた符号は濁音「が」、そして が清音の「さ」 が濁音の「ざ」、「このように、小円を多くの場面で使われると、おもしろいですよ。」と仰った。1分間講義（？）であった。教室を出ると、そこに林文一さんが待っておられた。時間も余りないようなので、車中で 20 符号ばかりについて、佐竹式ではどのように書かれるのかをおたずねした。その後も2～3度佐竹式符号のことで、おすがりするばかりの質問形式の文通やり取りをした。林文一さんは、共同通信社の職員であることが、後になって私の耳に入った。凛々しく厳しいお顔立ちをされた日に焼けた立派な青年だった。毎日、会社では活字の各号毎の返しが行われていた。そういう業務の中にも速記符号のことは忘れず、符号符号と符号のことばかりを考えていた。教職の兄の転勤のことなどもあり、そのあたたかい会社を辞めなければならなくなった。

昭和 31 年 8 月下旬　小諸市八幡神社に高砂部屋（朝潮、国登）の巡業相撲を見に行った。嘗ての前田山英五郎の勇姿を見た。ひとりのお弟子さんの泥着には、なぜか速記符号（確実にそう思えた）がちりばめられていた。珍しい夏姿であった。

昭和 33 年 8 月 1 日　丸子町役場職員拝名式（国保給付）。その後数人の新職員で町立金子図書館巡りをした。書棚より、早稲田式速記学習所の六冊ほどのテキストを見つけ、熊崎式と類似しているんだなあ、と知った。勤務の傍ら、速記符号勉強だけは継続していた。

昭和 36 年 5 月　長野県国民健康保険団体連合会診療報酬審査委員会に勤務。勤務時間の合間に、近くの長野県議会を3時間ほどにわたり傍聴をした。速記者は2人で、共に男性であった。小さ目の符号を書いておられるのが遠くから見て取れた。

昭和 37 年 9 月 3 日　長野県厚生農業協同組合連合会鹿教湯温泉療養所支部勤務を拝命。

昭和 39 年 4 月　同診療所リハビリテーション部言語療法科新創設勤務を拝命。

昭和 39 年 9 月　東大衛看卒業生 20 数人と、アイオア州立大学スピーチパソロジスト笹沼澄子スーパーバイザー、国立聴力言語障害センター課長神山五郎氏総勢 30 人程で美ヶ原、王ヶ頭まで歩いた。鹿教湯は総勢5人、9 月の高原は、草なめらかであった。王ヶ頭の草原に寝ころんで雑談中、速記符号の話が出た。「アメリカの言語療法士は誰もが速記が出来るよ。」と神山先生が仰った。それとても私が既にその時符号勉強をしていたからだった。東大衛看生の何人かは私を羨んだようだった。

昭和 40 年に入り、鹿教湯温泉療養所の従業員組合執行委員のひとりに選ばれた。私の場合は、組合内部での記録の仕事が多く、符号活動が始まった。しかし、速記体系はほとんど整っているとは言えない。試行錯誤しながら着手した。

昭和 40 年秋 「速記者の本当の姿を見てみたい。書いている符号を見てみたい。」と思い、長野県議会に傍聴見学に行った。西沢権一郎知事も若かった。でも、参考にはならなかった。その時の速記者は、森山力雄氏（松代　雨の宮）と山本賢三氏（長野市　三才）の2氏だった。

昭和41年2月　県議会傍聴に再び訪れた。森山氏の符号は複画派らしく大きな符号であった。力いっぱい書き連ねていた。山本氏は、単画派とみえて、チョコチョコと静かに書いていた。夕方の車中は寒く、乗客は皆寒そうだった。

昭和 41 年 5 月頃　金子図書館へ足を運んだ。金子図書館で見たテキスト（早稲田式）のすぐ近くに月刊早稲田式速記新聞を垣間見た。速記情報というものに飢えに飢えていた私は早速に早稲田速記学校へ電話した。「私もこの類の読み物を購読することはできませんか。」必死の思いで頼みこんだ。すると、にべもなくあっさりと「速記学校生徒か、速記関係でなければ駄目です。」ときつく言われた。しかし、私はその時「既に昭和 29 年 2 月より、熊崎式速記を独習している者です。未だに速記の資格はありません。しかし速記に対する情熱は誰にも負けないつもりです。お宅様の学校はどこにあるかも知れませんが、この新聞で高田馬場にある有名な速記学校だと知りました。この際新聞にも出ていましたので、速記シャープペンシルを3本程購入したいと思います。送金は必ず致します。早稲田式速記新聞も月に送金しますので、ぜひぜひお送り下さい。どうかこのあわれな 29 歳男を助けて下さい。お願いします。」と再三再四頼みこんだ。そして、約束は果たされた。あの時の事務員さんとのやりとりは長い時間だった。未だにその事務員さんのことが忘れられない。

昭和 41 年 11 月　世田谷の東京農業大学（？）速記検定試験三級受験、結果はおして知るべし。受験生が次から次へと殺到したものであった。

昭和 42 年正月頃　佐竹式速記学習コース本科と理論編の合冊を、佐竹康平先生がいきなりご送付下さった。非常に驚いたことであった。昭和 31 年 7 月にお会いした林文一さんのお口添えなどもあったものであろうと思われる。符号の間口が急に広がり、初めて見た2音文字符号などに接触し、これはどんなことをしてもやらなければならないなあ、と、肝に銘じた。しかし、無責任な符号勉強は許されない。なぜかと言えば、その時既に、自分で命名した「不知火式」の速記で、検定三級までの狙いをつけていたからであった。

昭和 42 年 4 月　法政大学通信教育学部文学部日本文学科入学。

昭和 42 年 9 月頃は、録音はオープンリールカセットが流行した。大学の勉強は別にして、鹿教湯温泉療養所機能回復訓練を中心としたリハビリテーション医学への取り組みも開始された。いわゆる「病院機構改革作り」であった。農協運動一丸となってリハビリテーション関係の業務、東大第三内科との連携のもと、オープンリールによる録記づくりの連続づくりの連続であった。一方、従業組合の関係の記録も連続していた。昼間の仕事の他、夜なべして仕事が続き、原稿用紙のマス目を埋めていった。

昭和 42 年 11 月から 44 年 5 月、8 月と数回にわたり検定試験三級を受けた。（詳細は不明）会場は世田谷ばかりであった。「不知火式」はやめて、「その他の速記」として受験した。その後、自治体に目を付けられ、丸子町の文化活動の一環として、夏期大学講座が夏に4回開催されたものが、オープンリール満載で送られてきた。病院の仕事をしながらであり、仕事量は増えた。２年間だけで中止にしてもらった。オープンリールからの聴き取り記録をしていると、人の話し声が種々様々で受験のためには大いに役立ったような気がした。

昭和 45 年 11 月　雨のそぼ降る朝、なぜか浮き足立っていた。朝6時の信越本線、大屋から一路東京農大へ突っ走った。受験生は秋雨の中を次から次へと集まっていた。受験開始前 15 分頃受験生の５～６人の集団で朗読練習が開始された。見ているだけでは脳がないので、傍に寄って雑紙に記録させてもらった。その一団は、言わずと知れた早稲田式速記の生徒さんたちだった。大きな符号だなあ、と思い、3分間ほど書かせて頂いた。三級の速さはこれだな、と確信を得た。受験朗読１分前の教官の試し朗読も、難なく乗り越えられた。受験本番の速さは、むしろ遅いぐらいであった。おそらく、一言半句誤らなかったであろう。夕方の渋谷駅は

ごった返していた。雨は冷たい雨にかわり、雨量も増した。後日、合格通知証が届いた（第 14 回検定三級）。

昭和57年 8 月　長野県上田市の上田山荘で、速記科学研究会が開催された。現在の速記科学研究会の前身ともいえるものであった。私がそこに参加すべきかどうかは、全くわからなかったが、「長野の倉嶋さんという人の書いている符号は小さくて何となくユニークである」とのことが前評判になっていたようだった。加古修一さんからのお招きのお電話もあった事実も覚えている。その会場には、西来路秀男先生がご参加なされておられた。私の持てる速記記号のあらましを、30 分間余りにわたりその場で説明させて頂いた。午後に至り、西来路秀男先生の御講評があった。「一応の全体の筋が通っていて体系的であり、確かにユニークさが感じられます。これからは、『丸子式』として、さらに一段と符号研究を継続して下さい。そして５人くらいの学習者を養い、検定三級程の実力者を育てて下さい。不知火式や御苗字の倉嶋式もよいでしょうが、御苗字ではあまりにもわからないです。世の中は PR の時代です。丸子とさせて頂いたのは、地元、丸子実業高等学校野球チームがしばしば夏の甲子園球場に出場します。夏だけではなく春の選抜大会にもよく出場します。いまや「丸子」の名を知らない人は日本中に誰ひとりとしておらないでしょう。『丸子式』として、あらためて命名させて下さい。」と仰って下さった。この席には、加古修一先生をはじめ、菅原登先生、 岡本さんという方の、とてもおもしろくてためになる岡本式（？）という速記符号を学ばせていただいたことも覚えている。

昭和 53 年 1 月　早稲田式共練会開催の通知を受けた。会場の上田第一中学校には、午前 11 時になっても訪れる人もなく、ひたすらに速記符号を黒板に書いて来校者を待っていたのを覚えている。

昭和 53 年 7 月 31 日　恥も外聞もなく、私は長野市の三才というところの山本賢三さん宅を訪れた。もう県のお仕事は降りられたとのことであった。地域の文化活動に従事なされておられるとのこと。前日あたりに、どのような形で連絡を取り合ったかは、もう覚えていない。県議会の傍聴のことなどを皮切りに、「省略符号について」の私の勝手な題材について質問を持ち出した。円満なお人で、午後の２～３時間を、私に応対して下さった。山本さんは「なるべくならば、省略符号などは眼中においてはいけません。もっともっと、基本符号にのみ集中すべきです。基本符号中心の符号の勉強に情熱を傾けて下さい。」と仰った。そして、「私は 40 年以上も速記をやってきましたが、いわゆる晩年になり、基本符号の大切さを知りました。私も長い年月のある一定の期間、書きにくい符号が沢山ありましたので、本気になって省略符号をこしらえてみました。およそ 300 符号と、文節でしたか。でも、晩年になってから、どんなにやっても身に脳に入りません。それならば、もとに立ちかえったほうが早道だ、と決心して軌道修正しました。私は、県議会の速記の仕事は基礎符号ばかりで立ちさばきました。何でもかんでも片っ端から基礎符号に郷帰りさせる方向に意識を向けて、これに傾注していきました。他人のしゃべり言葉に何十年も取り組んで書いて立ち捌いてきたという実力は、いつか苦境に立たされた場合でも、必ずこの自分を助けてくれます。何も心配はいりません。そして、倉嶋さんは現在、検定二級ぐらいのお力がおありだ。速記学習での師や学友無く努力された倉嶋さんは、今更色々に考える必要はありませんよ。これからも速記の大道を堂々と立ち歩んで下さい。力強く、何ら恥じ入ることなく。」と。これは、後日に頂戴した手紙文の中の激励部分の一部を書きぬいて再括したものである。

昭和 53 年 8 月 15 日　九段下の中根速記学校の夏の授業風景を、ずうずうしくも見学させて頂いた。教師の御名前は失念してしまったが、その時朗読させていたその先生にはその後もお世話になったものだ。その時、「お盆休み中なので人手が足りなくてねえ。」とのこと。それでも１時間半は対談させて頂いた。もちろん、

今日までの私の速記歴のことが話題の中心であった。

昭和53年11月　長野市蔵春閣で開催された共練会に歩を運んだ。佐賀田先生の熱心なご指導を拝見し、教室授業とはこういうものであろうかと胸が熱くなった。

昭和54年8月　まだまだ私は二級の身。中根速記学校で出会った先生は、「倉嶋さん。そこまで独学でおやりになってきたのならば現在持てる式を死蔵させていたらいけませんよ。必ず世に出して下さいよ。大集大成作業とはなりますが世に出して下さい。必ず世の中の速記関係者の目に広めて下さい。きっとですよ。」との激励のお手紙を後日寄せて下さり、強い強い刺激を与えて下さったのであった。おそらくその年の9月の初め、国会図書館に行ったが新しい関係著はあまりなく、係の人は分厚い書籍のものばかりを出して下さった。

昭和56年8月　日本速記協会主催第57回一級試験受験。会場は、文化女子大学付属長野高校であり、長野駅から東に向かい、近道を通り会場へ歩いた。8月の下旬で、うだるような暑さであった。帰途、中島会館で、ビールとチャーハンにて、うがった話をしながら、静かに祝杯をあげた。自信満々であった。大脳の脳みそ隅々にまで、ビールが浸透した。受験中奮闘の結果、空洞になった脳の中に、「ジュウ！」と音がするぐらいにビールの泡一粒一粒が駆け巡った。長野駅まで来ると、災害復旧のための長野市消防隊100人以上が、消防車の作業点検などをしていた。宇原川が大氾濫したその後の復旧現場からの帰りのようであった。周囲は泥水でいっぱいで、長野駅にいてさえその時の惨状が如実だった。

～～　速記検定一級合格通知が届いた。 万葉集の
「われはもや　安見児得たり　みな人の　得がてにすとう　安見児得たり」
の有頂天の感を味わった。 ～～

以降の速記記録覚書

従業員組合関係の主な講演記録

・ジャスコ支店長　地域と店のあり方についての講演

・スーパーラッピィ設立に当たっての苦心談

・佐久総合病院院長　若月俊一さん　労働組合とは

・佐久総合病院外科医長　船崎善三郎さん　中央執行委員会の立場から

・諏訪中央病院院長　鎌田實さん　講演会

・矢島診療所　矢嶋嶺さん　家で死ぬことの理想

他、同類の講演会記録多数

自治体（市町村、区など）からの要請で記録したもの

・丸子町夏期大学講座　八題

・上田福祉敬愛学院教授　山岸周作さん　買い物難民について考える

・理学療法士　古川正雄さん　全盲の人生　自治会人権教育講演会

・信濃史学会会長　一志茂樹さん　木曽義仲と丸子

・武石村介護保険制度改定に関するパネルディスカッションの記録

仏教関係の講演記録

・身延山久遠寺　福井教明上人　講座説教記録

・作家　塚本三郎さん　日蓮宗長野県御法大会記念講演

上田丸子地域への PR として

・彩の森総合文化展（市・町の文化展）出展

教育委員の立場より PR も兼ねて

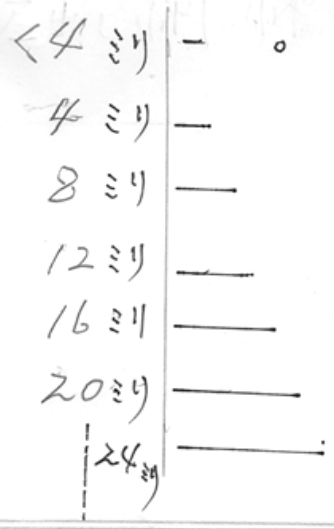
・上田市立丸子中学校　露草祭　文化展出展

・上田市立丸子北中学校　秋桜祭　文化展出展

速記符号の見方・書き方

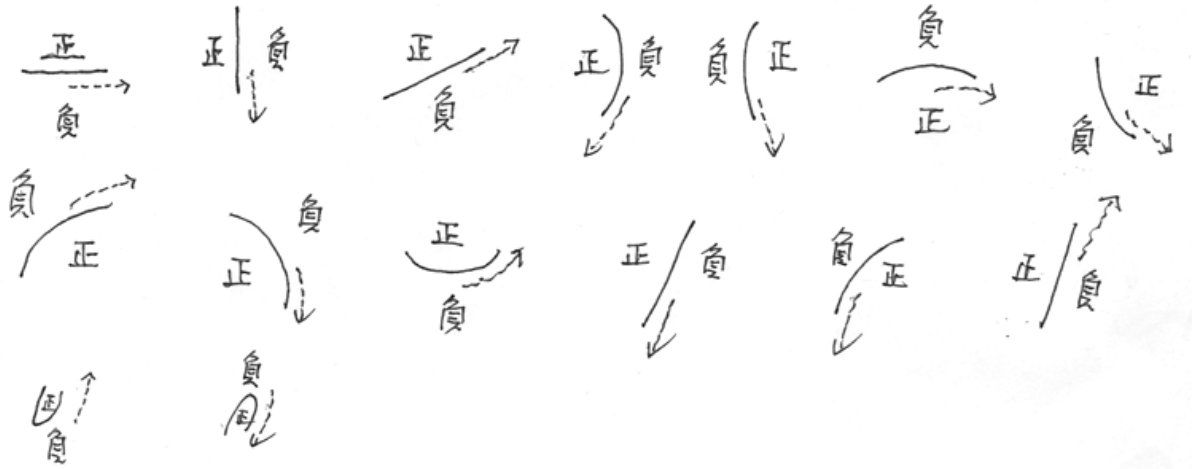
10 ミリ

符号の長さ



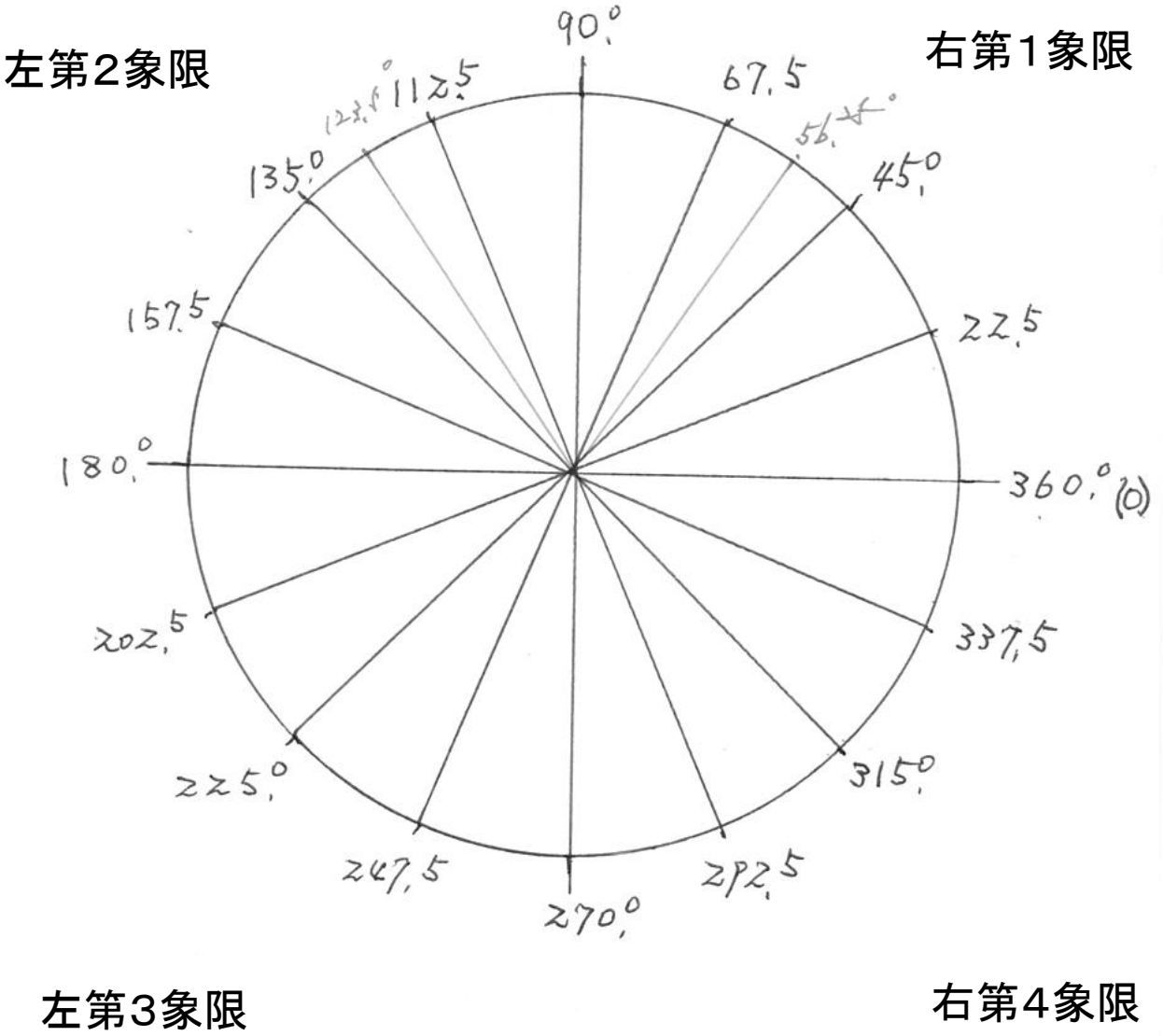
※ 厳密に絶対的に指定された長さで書くというものではない。長さの比率の基準である。従って解説では［約○ミリ］としてある。20ミリより上は際限を設けない。

正側、負側



※ 清音「い」は主に正側に続き 清音［に］は負側に続く。但し、厳密な規定ではなく種々な符号対応で変わることもあり得る。

線の方向・角度


左第2象限
右第1象限
左第3象限
右第4象限
90°
67.5
45°
22.5
360°(0)
337.5
315°
292.5
270°
247.5
225°
202.5
180°
157.5
135°
112.5